

研究結果

本研究課題は、ドレズ (Deleuze) とガタリ (Guattari) の少数集団文学という、普遍的な文学理論を通じて在日韓国人文学を見直したものである。ドレズとガタリは『カフカ:少数集団文学のために』という著書の中で、少数集団の文学という概念の重要性を述べている。これによると、彼らは少数集団の文学を「少数集団の言語から成立した文学というより、支配集団の言語圏の中で、少数集団が作り上げる文学である」と、定義し、少数集団文学の重要な特徴として、次の三つを提示している。それは、「言語の脱領土化」、「少数集団の文学が持っている政治的な性格」と「発話行為の集団的配置」である。

本研究課題では、在日韓国人文学でドレズとガタリの少数集団文学の特徴が具体的にどのように表われているかを検証することを試みた。つまり、本研究課題では、在日韓国人文学の中で、政治的な性格、発話行為の集団的配置など、ドレズとガタリの少数集団の文学の特徴が具体的にどのように表われているか等を考察した。

例えば、金城一紀の『GO』の中で、正一は、ちまチョゴリを着た朝鮮人女学生に話かけようとした日本人男子学生に殺される。しかし、正一を刺した日本人男子学生も自殺するのである。このように、少数集団の正一の死は少数集団の在日韓国人だけの問題ではなく、多数集団の日本人をも巻き込むのである。要するに、少数集団の問題は、多数集団とも密接な関係にあると言える。

支配民族の文学圏では、単に行人の足をひっかける問題がここでは生と死、即ち生存の問題として浮き彫りにされる。これが少数集団の文学が持つ政治的な特徴であり、更に、これは少数集団の文学の集団的な特性とも深く関連している。このように検証してみると、在日韓国人文学は、ドレズとガタリが述べている少数集団文学の特徴が何よりも鮮明に色濃く表れている文学であると言えるのである。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

少数集団文学としての在日韓国人文学研究
ードレズとガタリの少数集団文学の理論を中心にー
(黄奉模、日本研究所、2010年9月10日(金) 韓国外大)

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)